家庭菜園 Q&A

問題解決!

南部営農センター
園芸課
検校 哲也

Q1 ポインセチアが色づくのは秋の紅葉と同じ仕組みなんですか?

A1 真っ赤な葉がクリスマス気分を盛り上げてくれるポインセチア。この花を包むように生えている葉は、苞(ほう)と呼ばれるもので、実は葉ではありません。花を守る萼(がく)のようなもので、その付け根に小さな黄色い花が着きます。

花芽がつくられる頃から苞は赤く色づき始めます。一方、秋の紅葉は、日差しが傾き気温が下がって光合成の活動が弱くなると色づき始めます。いずれも、赤色の天然色素であるアントシアニンの色です。

ポインセチアは、花に虫を呼ぶために色づきます。紅葉は、光合成活動をしていたクロロフィル(葉緑素)がなくなってきて、黄色のカロチノイドや赤色のアントシアニンが目立つようになって色づきます。

さて、ポインセチアは、日が短くなると花が咲く短日植物です。外に置いておくと、十月下旬から花芽分化が始まります。

でも、寒さに弱いので屋内に入れます。そうすると、夜も明るい部屋で育てることになり、いつまでたっても色づきません。

そこで、短日処理です。夕方から翌朝まで、大きめの段ボールをすっぽりかぶせ、光を当てないように真っ暗にします。忘れないように毎日、夕方5時から翌朝8時まで、段ボールの中で眠ってもらいます。そうすると、1カ月過ぎごろから色づいてきます。

クリスマスに合わせるとなると、十月に入ったら短日処理を始めます。段ボールをかぶせっぱなしにしたり、かぶせる時間がまちまちだったりすると、ポインセチアが混乱して開花する準備に入れません。

ちょっと大変ですが、チャレンジしてみてはどうですか。

Q2 昔、農薬を使わないで米を作っていたころ、どうやって害虫を駆除していたんでしょう?

A2 農薬はありませんから、人の手で虫を追い払ったり捕まえるしかありません。お祓いなどの儀式を行うことで、害虫退散、豊作を祈願しました。

虫送りという儀式は全国各地に残っています。愛知県の無形民俗文化財に稲沢市祖父江島本の「虫送り」があります。稲を荒らす害虫を追い払い豊作を祈願する行事で、七月十日に近い土曜日に行われています。当日の日中、麦わらを材料にした等身大の人形と松明(たいまつ)を作ります。日が落ちてから、提灯を先頭に、人形、松明と続く行列が、虫を追い払いながら水田を練り歩きます。太鼓と鐘の音に合わせて進み、虫送り場にすべての松明行列が集まります。

写真1

最後に、松明とともに人形を燃え盛る炎の中に投げ込み、害虫になぞらえられた人形を昇天させ、儀式は終了となります。(写真1:稲沢市観光協会)

さて、江戸時代になると、鯨からとった油や菜種油を水田にまいて油の膜を作り、そこに害虫を払い落とし、油で呼吸ができなくする殺虫方法が広まりました。

このほか、タバコの葉や除虫菊など天然の殺虫成分を原料にした農薬も使われています。また、切り株を焼いたり埋め込んだり、畔や土手を焼くことで害虫が越冬しないようにしました。

住宅地が増えた今、畔や土手を焼くことは難しくなりましたが、害虫防除に有効な手段に変わりはありません。水田周りの除草は害虫の住処を減らすことになるので、草刈りは必須の防除作業と言えます。

農薬が開発されてからは農薬頼りになったかもしれませんが、抵抗性品種の開発や栽培時期をずらすなどの技術を組み合わせて、なるべく農薬を使わない環境に配慮した農法が取り組まれています。

オンライン農業塾はこちら
動画はコチラ

管内の病害虫情報はこちら

家庭菜園情報はこちら